

談話室

自由に気楽に！

田頭規夫*

Norio Tagashira

この号から、この欄は「会員の声」から「談話室」というタイトルに変わり、そのトップバッターにお鉢が回ってきたので、いささか戸惑っている。物事、何でも最初が肝心だからである。

そもそも「談話室」というタイトルに変えたのは、お硬い内容の多いこの会誌に今まで以上に、一片のやさらぎの場を与えようという意図と察した。

私は、昨年夏、永年勤めていた会社を引退し、現在はコンサルタントの事務所を設けている。

アメリカでは、会社を停年退職する日、飛び上って喜ぶそうであるが、日本人は淋しく去っていく人が多い。私はアメリカ流の考え方なのか、なんとなく心うきうきという感じであった。生活が変わり、仕事も自由になり、一度、自分の思うままの自由な事がしてみたいと待ち遠しかったからである。

世の中、自由だ、自由だ、といっても、考えて見れば自由に思うがままに出来る事など案外少ないものだが、会社勤めをやめるとよく分かる。

私の会社生活は、出来るだけ自分の思うままに、勝手気ままに仕事をしてきた積もりであるが、それでも組織の中にいると、いかに束縛され、制限を受けた行動をしていたか、解放されてみて、はじめて分かる。

まず、仕事の時間は、8時から5時まで。体調が良くても悪くても、この時間の中で最高の能率が上がるよう義務づけられている。

集団で仕事をする以上は仕方のないことであるが、これが解放されるとどうなるか。

私の場合、自宅に事務所を設けているので、通勤時間は0である。何時から仕事を始めてもよい。仕事の能率が最高の時を選んで、集中的に片付ければよいから、能率は会社勤めの2倍以上に上がるような気がする。なんと、自由に仕事が出来るということは、すばらしいことか。毎日、実感として味わっている。

本格的に、仕事を再開すれば、こんな自由は得られないと思って、引退後の貴重な自由時間に、自分の思うがままの自由な事がしてみたいと、最初に手がけたのが、自費出版の本を作ることであった。

今まで、原稿を書いたことは、しばしばあるが、出版社や学会からの依頼原稿が多く、依頼される時点で、既にテーマが決まっており、原稿用紙は何枚、こういう点を強調して欲しい、納期は何月何日と、かなりの制限、制約のもとで書かされていた。今、書いているこの原稿もその例外ではない。

それに比べて、自費出版は、全く自分の思うまま、何らの制限を受けることはなく、何を書いても自由なのである。当たり前のことだが、自分が作る段になって、つくづく味わうことが出来た。

しかし、本を作るからには、他人に読んでもらいたいから、あまり自由奔放すぎても困る。そこで近ごろ流行の回想録的なものを書くことにしたが、無名の者が回想録を書いても誰も読んでくれないから、単に自分史というだけでなく、自分の考え方も加えて、誰にでも読んでいただけるよう工夫した。

考え方はいくら自由といっても、理性が働く。自分の考え方は間違っていないか、同じテーマの本を短時間に読みあさったが、人によって考え方は随分違うことが分かった。中には他人の考え方を名指しで反論している本にもお目にかかった。この種の、自由に批判する本が増えることは、読者にとっては楽しいことである。

この「談話室」も品位の高い随想と共に、自由に他人の考え方を批判できる気楽で飾り気のないエッセイのためのスペースでありたいと願っている。

また「会員の声」以上に会員の自由な声が集まり、それによってこの研究会が、よりすぐれたものになり「談話室」の役目が果せることを望むものである。

* 田頭経営研究所所長

〒662 西宮市平松町5-12